1939年（昭和14年）のソ連対外政策

ノモンハンからポーランドそしてフィンランドへ

福井義高

青山学院大学国際マネジメント研究科

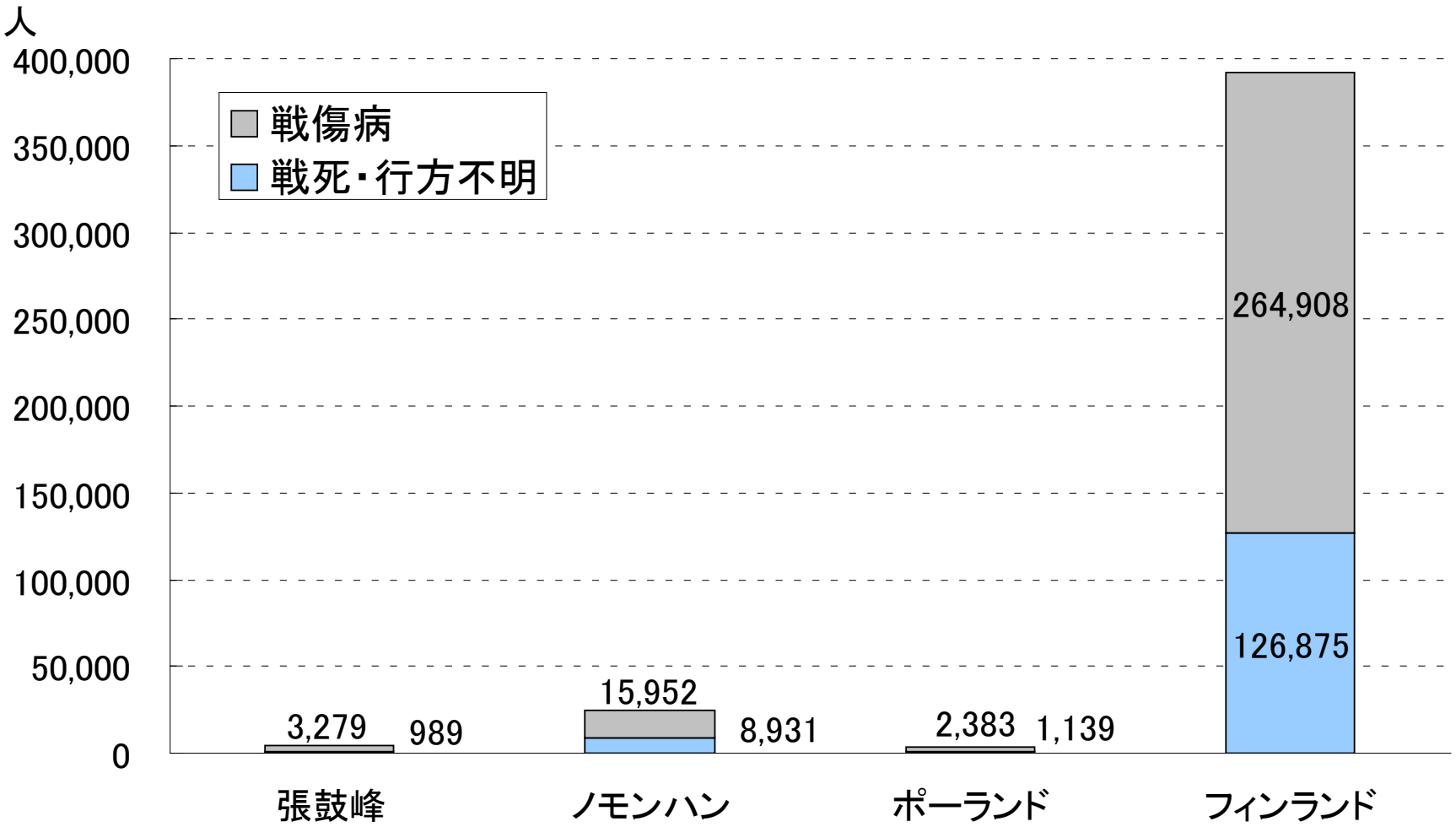
fukui@gsim.aoyama.ac.jp

平成22年5月16日

今日、何を伝えたいか

- なぜ局地紛争が第二次世界大戦となったのか？
  - スターリン：革命家にしてリアリスト
  - 1939年：世界革命実現のチャンス到来
- ノモンハン、ポーランド、フィンランドの背後に存在するスターリンの意図
- グローバルなパワーゲームの一員としての（自覚せざる？）日本の重要性

ソ連軍の人的損失比較



出典：Soviet Casualties and Combat Losses

先行研究（国内）

- 細谷千博「三国同盟と日ソ中立条約」
  『太平洋戦争への道』

「我ガ方ガ対独協定ヲ締結セルハ欧州ニ於ケル戦争ヲ必要トセル結果ニシテ」（ソ駐日大使宛回訓）

- 守屋純「独ソ戦発生をめぐる謎」『軍事史学』25(3/4)
- 三宅正樹『スターリン、ヒトラーと日ソ独伊連合構想』

「最近の研究には、スターリンが早ければ1941年秋頃に対ドイツ開戦を予定し、攻撃を準備していたのに、ヒトラーに先を越されてしまって焦ったのだという考察が多くなってきているようである。」

先行研究（海外）

- ドイツ・オーストリア

  H. Magenheimer, W. Post, S. Scheil

  （以下故人）

  J. Hoffmann, W. Maser, E. Topitsch
- ロシア

  П. Бобылев, М. Мельтюхов, В. Невежин,

  И. Павлова, А. Пронин, В. Суворов
- 英語圏

  A. Hill, E. Mawdsley, R. Raack, E. Ziemke

1930年代の国内イデオロギー教育

- パヴレンコ『東方にて』(На Востоке)；1936年

  193X年3月、関東軍が満ソ国境を越え攻撃するも、赤軍は直ちに反撃し満洲内に進軍、東京は空襲で焼け野原となり、日本国内では労働者・農民が蜂起、内乱が勃発

  これは単なる空想小説でなく、来るべき世界革命に向けたイデオロギー教育の一環
- パヴレンコは反独映画『アレクサンドル・ネフスキー』（監督エイゼンシュテイン； 1938年）の脚本も担当

赤軍粛清:スターリン赤軍完全掌握

- 1937年4月、労働国防委員会(CTO)廃止、閣内の国防委員会(議長モロトフ首相)で軍政を掌握
- 1937年5月、トハチェフスキー逮捕、政治委員制復活
- 1938年3月、総合軍事委員会(Главный Военный Совет РККА ; 議長ヴォロシロフ国防相)設立、参謀本部とГРУを直接配下に、週2～3回の頻度で開催、軍令を掌握
- 粛清の規模、赤軍弱体化論へは疑問も

1939年野戦教程 (Полевой Устав)

- スターリンの意向を反映した、党に従属する革命の尖兵として敵地で攻撃戦を遂行するという赤軍の基本思想を明確に表現:

  敵が我々に戦争を強いる場合、労農赤軍は攻撃軍のうち歴史上最も攻撃的な軍隊となる。

  我々は、敵の完全な粉砕という決定的目標をもって、戦争をまさにその敵の領土で攻撃的に遂行する。

  赤軍は、被抑圧者と奴隷の解放者として、攻撃してきた敵の領土に足を踏み入れる。

着実に進む軍備増強と作戦計画立案

- 1938年3月、参謀総長シャポシニコフが、ドイツを主敵（日本も対象）として、防御（自衛）ではなく、攻撃（侵略）を前提とした作戦計画立案、総合軍事委員会で11月承認
- 1938年9月、部分動員でチェコ「支援」準備（90個師団、独軍の倍以上）と同時に、テッシェン（チェコ領）併合を狙うポーランドに警告
- 1928年に始まった第一次5ヵ年計画以来、民生を犠牲に軍備増強を進め，1939年1月時点で、赤軍戦車保有台数は他国合計を上回る1万8千台、飛行機その他も同様で、少なくとも量で他国を圧倒

1938年9月『共産党小史』: 世界革命準備

- 日本帝国主義者により極東に戦争の第一の根源地が、ドイツ・ファシストにより欧州で第二の根源地が形成され、第二次帝国主義戦争がはじまった
- ファシスト国家よりも強力な「民主」国家は前者を利用して、「危険な」労働運動・民族解放運動への「解毒剤」としている
- プロレタリア革命の時期、権力獲得のため、直接に勢力を準備する時代が到来した
- もちろん、それを主導するのはソ連共産党

1938年10月1日プロパガンダ担当者会議

ボルシェビキは、単に平和に恋焦がれ、攻撃[侵略]されたときだけ武器を取る平和主義者なのではない。それは全く正しくない。ボルシェビキ自らが先に攻撃するだろう場合がある。戦争が正義であり、状況が適切であり、条件が好都合であれば、自ら攻撃を開始するのだ。ボルシェビキは攻撃に反対しているわけでは全然ないし、全ての戦争に反対してもいない。今日、我々が防御[自衛]を盛んに論じるのは、それはベールだよベール。全ての国家が仮面をかぶっている。「狼の間で生きるときは狼のように吠えねばならぬ。」(笑)。我々の本心を全て洗いざらい打ち明けて、手の内を明かすとしたら、それは愚かなことだ。そんなことをすれば間抜けだといわれる。

レーニンはまた、ある国は遅れる一方、別の国は先に進み、ある国は努力する一方、別の国はもたもたするので、同時に攻撃することは不可能だという結論にも達していたのだ[『プロレタリア革命の軍事綱領』]。

レーニンは言う、「発展は跛行的に生じる」と。．．．つまり、異なった国の間で社会主義への成熟度合いが異なっており、この事態に直面して、全ての国で同時に社会主義が勝利する可能性があるなどとどうして語りうるのか。全くばかげている。そんなことはかつても不可能であったし、今日においてもあり得ない。

1939年3月第18回党大会と独チェコ併合

- 3月10日、スターリン、党大会報告で、『共産党小史』での主張を繰り返し、英米仏と日独伊を同一視；ソ連が前者に利用されることを拒絶；カルパト‐ウクライナに特別に言及
- 3月16日、独チェコ併合で、カルパト‐ウクライナの独立意向を無視し、ハンガリーによる武力併合を認め、対ソ「善意」を示す
- 3月20日、リトヴィノフ、独駐ソ大使にチェコ併合に形式的抗議のみで、カルパト‐ウクライナ独立を認めなかったことを評価（東郷大使夫人の不審な行動）

  以後の独ソ交渉で独側はこの点を何度も強調

英独を手玉にとるポーランド

- 1月5日、ポ外相、直接会談で前年10月のテッシェン併合支持の見返りを期待したヒトラーの「ダンチヒ返還・回廊通行権＋国境画定」という年来の主張に否定的回答
- 3月26日、部分動員（23日）直後、ポ駐独大使、これ以上のダンチヒ返還要求は戦争を意味と独外相を「威嚇」
- 3月31日、ポから交渉経緯を知らされず、英、ポーランド保障宣言、いわゆる「白地小切手（Blank Cheque）発行」
- 4月3日、ヒトラー、対ポ「白」作戦に署名
- 4月7日、ムソリーニ、アルバニア侵攻開始
- 4月13日、英、ルーマニア、ギリシャにも保障宣言

スターリンに翻弄される英仏

- 4月18日、英仏の対独協定提案に、バルト海から黒海までの東欧諸国を含めることを要求
- 5月15日、エストニア、ラトビア、フィンランドの「保障」と軍事協定を要求
- 6月2日、国際連盟規約と関連させることを拒否
- 7月1日、英、秘密議定書提案；ソ連、間接侵略提起
- 7月29日、英仏、独ソ不可侵条約類似の協定案提出

  秘密議定書で、トルコ、ギリシャ、ルーマニア、ポーランド、ベルギー、エストニア、ラトヴィア、フィンランドを「保障」（下線は独ソ秘密議定書のソ連勢力範囲）

一方、ドイツにも思わせぶりな態度

- 5月4日、ユダヤ人リトヴィノフ解任、モロトフ外相就任
- 5月31日、モロトフ、最高ソヴィエト演説で防共協定は反英とする一方、ノモンハンで交戦中の日本に強い警告
- 6月15日、ソ駐独代理公使が、ブルガリア駐独公使を通じて、ソ連の「友好的」意図をドイツに伝達
- 7月26日、ソ代理公使、独外務省幹部に、バルト諸国、フィンランド、ルーマニアを勢力圏と認識

  独側、日独友好は反ソにあらず、英より独好条件提供
- 8月3日、モロトフ、独駐ソ大使に、日本の反ソ姿勢非難とソ連勢力圏にリトアニアが含まれるか否か確認

  独側、英仏と天秤に掛けられているという感触

日伊に裏切られたヒトラー

- 8月10日、町尻軍務局長、反英政策が貫徹できないことを独伊駐日大使に伝達
- 8月12日、チアノ伊外相、直接会談で対ポーランド限定戦争が可能と主張するヒトラーに対し、対英仏戦への発展は不可避であり、5月22日締結の独伊鋼鉄条約にもかかわらず、伊は参戦しないことを強く示唆
- ヒトラー、国内外に対して自らの威信の問題となってきたダンチヒ問題解決のため、残された唯一の選択肢、ソ連に賭けることを決意

スターリン独ソ不可侵条約締結決断

- 8月12日、モスクワで英仏ソ軍事協定交渉開始
- 8月14日、独外相、モスクワ訪問をモロトフに提案
- 8月15日、モロトフ、日ソ仲介依頼と不可侵条約提案バルト諸国保障、条約は具体的である必要性強調
- 8月16日、独外相不可侵条約に同意
- 8月17日、モロトフ、貿易信用協定がまず必要、秘密議定書を条件とした不可侵条約締結はその後と主張
- 8月19日、モロトフ、独駐ソ大使に一旦、独外相訪ソに難色を示すも、スターリンの指示を受け、同日2回目の会談で26か27日訪問を提案

  ベルリンで深夜、貿易信用協定締結

ノモンハン総攻撃と独ソ不可侵条約

- 8月20日、ヒトラー、26日ポ攻撃予定を前に、22か23日の独外相訪ソを懇願するHerr Stalin宛親書
- 同日、ジューコフ、ノモンハンで総攻撃開始
- 8月21日、スターリン、23日訪ソ了承の返答
- 8月23日、独外相訪ソ、同日深夜に不可侵条約締結
- 同条約・秘密議定書は7月29日の英仏ソ協定案に類似
  エストニア、ラトヴィア、フィンランド、ルーマニア領ベッサラビアがソ連;リトアニアが独;ポーランドは両者
- 同条約締結により、戦争は必然となったのか？
  ヒトラーの主観的意図はソ連を含んだ「ミュンヘン」？

万策尽きたヒトラー、対ポーランド開戦

- 8月25日、チェンバレンは英ポ相互援助条約（秘密議定書で対独に限定）締結で対抗
- 同日、冒頭で日本を批判したヒトラーからの親書に、ムソリーニ、参戦不可能と即日返答
- 同日、対英妥協を模索し、26日ポ攻撃に中止命令
- ゲーリング、スウェーデン人ダレルス（Dahlerus)を密使に、戦争回避のため必死の対英交渉
- 英、ポーランド説得継続も、英仏の「保障」（特に仏陸軍投入）を当てにしたポは対独強硬路線に固執
- 秘密議定書を24日に入手した米、英仏ポに伝達せず
- 9月1日、攻撃開始、3日、英仏対独宣戦布告

9月7日ディミトロフ日記

この戦争は二つの資本主義国家群（植民地、原料などに関して貧しいグループと豊かなグループ）の間で、世界再分割、世界支配をめぐり行われている。我々は、両陣営が激しく戦い、お互い弱めあうことに異存はない。ドイツの手で豊かな資本主義国、特にイギリスの地位がぐらつくのは、悪い話ではない。ヒトラーは、自らは気付かず望みもしないのに、資本主義体制をぶち壊し、掘り崩しているのだ。

権力を握った場合と反対勢力でいる場合とでは、共産主義者の態度は異なってくる。我々は自分の家の主人である。資本主義国家における共産主義者は反対勢力であり、そこでの主人はブルジョアジーだ。

我々は、さらにずたずたに引き裂きあうように、両者をけしかける策を弄することができる。不可侵条約はある程度ドイツを助けることになる。次の一手は反対陣営をけしかけることだ。

資本主義国家の共産主義者は、自国政府と戦争に反対して、断固として立ち上がらねばならない。この戦争が始まるまで、ファシズムとデモクラシー体制を対立させることは全く正しかった。帝国主義列強間の戦争時には、これはもう正しくない。資本主義国家をファシスト陣営とデモクラシー陣営に区別することは、かつて持っていた意味を失った。．．．

今日、統一人民戦線や国民統一といった昨日までの立場を主張することは、ブルジョアジーの立場に陥ることを意味する。こうしたスローガンは撤回される。

かつて歴史的には、ポーランド国家は民族国家であった。それゆえ、革命家たちは分割と隷属化に反対して、ポーランドを擁護した。現在、ポーランドはファシスト国家で、ウクライナ人、ベラルーシ人その他を抑圧している。現在の状況下でこの国を絶滅することは、ブルジョア・ファシスト国家がひとつ少なくなることを意味するのだ。ポーランドを粉砕した結果、我々が社会主義体制を新たな領土と住民に拡大したとして、どんな悪いことがあるというのか。

我々は、いわゆるデモクラシー諸国との合意を優先し、交渉を続けた。しかし、イギリスとフランスは我々を下男にしようとし、おまけにそれに対して何も払おうとしなかった。我々はもちろん下男になりはしなかった。．．．

1935年9月2日カガノヴィッチ、モロトフ宛書簡

アビシニアでの紛争を考慮して、穀物その他食料品をソ連邦からイタリアへ輸出することへの．．．外交人民部の疑念は国際情勢への無理解から生じている．．．。紛争はイタリアとアビシニアとの間で生じているというよりも、イタリアとフランスを一方に、イギリスをもう一方として生じているのだ。．．．両者間のけんかが激しければ激しいほど、ソ連邦にとっては好ましい。両者が殴りあい続けられるよう、我々は穀物をこちら、そしてあちらへと売ることができる。片方が今、他方を撃破してしまえば、我々にとって全く不利となる。一方が他方にすぐ勝つことなく、両者の間のけんかができるだけ長引くことこそ、我々にとって好都合なのだ。

ノモンハン停戦と「西ウクライナ・西ベラルーシ解放」

- ドイツ快進撃、独外相の即時参戦要求も、赤軍動かず、独軍「分割線」を越える
- ノモンハン8月攻勢で赤軍の輸送・補給に大きな負荷
- 9月9日、独外相、大島大使に日ソ仲介と反英の日独伊ソ連携を提案
- 9月14日、モロトフ、独大使に「予想外」に早く参戦準備完了と伝達
- 9月16日、ノモンハン停戦、英米で日ソ提携観測強まる
- 9月17日、「ポーランドは既に消滅、西ウクライナ・西ベラルーシの同胞を保護する」という口実で、ソ連参戦

ポーランド完全分割：独和平工作妨害

- ヒトラー、英仏参戦も、戦争を限定化し和平交渉に入るため、国家としてのポーランド維持を意図、しかし、
- 9月20日、モロトフ、独大使にポーランド完全分割提案
- 9月25日、スターリン、ポーランド分割線を東（ほぼカーゾン線）にずらす見返りに、リトアニア要求
- 9月28日、独ソ国境友好条約締結・秘密議定書改訂

  同時に、独が「工業製品」輸出、ソ連が原材料輸出の経済協力推進合意

独ソ蜜月演出の裏で

- 新条約締結直後、対独動員展開計画策定命令
- 9月28日～10月10日、エストニア、ラトビア、リトアニアと相互援助条約 締結、衛星国化完了
- バルト三国と違い、フィンランドには領土割譲も要求、ソ・フィン関係は10月以降、急激に悪化
- 仏共産党を通じたフランスでのサボタージュ活動激化

一方、ドイツは

- バルト・ドイツ人の本土帰還運動開始
- 戦争拡大を防ぐため、ゲーリングを中心に英仏との和平交渉を模索

10月9日ヒトラー三軍最高指令官宛意見書

- 現状で和平が成立すればよし

さもなくば、

- 英仏の目的は独解体、独の目的は英仏軍殲滅、領土占領は二の次、時間は独ではなく英仏の味方
- ソ連中立確保には独の優位性を現実に示す必要
- 蘭・ベルギーは英仏の圧力に中立放棄必至
- 北欧・南東欧諸国の中立は当分継続
- ムソリーニを除き伊は信用できない
- 日本は自らの利害だけで行動
- ただ成功だけが独の「同盟国」、秋の間に仏攻撃準備

11月30日プラウダ

私はいったいどこのキャバレー（café-chantant）でこの嘘が捏造されたか知る由もない。しかし．．．以下の点を否定することはできまい。

а)ドイツが仏英を攻撃したのではなく、仏英がドイツを攻撃したのであり、現在の戦争の責任は仏英にある。

б) 戦争状態の開始後、ドイツは仏英に和平提案を行い、ソ同盟はドイツの和平提案を公然と支持した。なぜなら、速やかな戦争の終結が根本的に全ての国と人民の状況を和らげるとソ同盟は考えたし、今もそう考えているからだ。

в)英仏の支配層は、ドイツの和平提案も、ソ同盟による速やかな戦争終結を達成しようとする試みも、両方ともぞんざいに拒否した。

フィンランド攻撃とドイツ圧迫

- 11月30日、フィンランド攻撃、冬戦争開始
- 12月1日、国境の寒村にクーシネン首班政府樹立
- 12月1日、ソ訪独経済使節、独に武器供与要求
- 12月2日、「フィンランド民主共和国」と相互援助友好条約締結
- ソ連、赤軍はクーシネン政権を援助するため、ヘルシンキの反乱勢力と戦っていると主張
- 12月14日、ソ連国際連盟除名（日独伊は自主脱退）
- 12月19日、モロトフ、独大使に経済協定の「工業製品」に武器が含まれていると強硬に主張

1940年1月21日ディミトロフ日記

一度の行為としての世界革命など戯言だ。それは違った国違った時代でそれぞれに進行する。赤軍の活動もまた世界革命との関係で存在するのだ。．．．

十分な訓練も受けず、ひどい服と靴で戦ってきた、そして今やっと我々が満足な服と靴を提供しようとしている赤軍の戦士たち、自らの誇り－いくばくか傷ついた誇り－と名声のために戦っている彼らに乾杯！

2月2日ヒトラー・伊駐独代理公使会談

零下40度の寒さでは如何なる国、ドイツでさえ攻撃を貫徹することなどできない。理解できないのは、よりによってなぜロシアが冬の始めにそこ[フィンランド]で戦争を開始したかだ。．．．

[ソ・フィン関係は]平和的に推移するはずだった。しかしここでもまた、フランス、そして何よりイギリスが、スウェーデンを通じて、フィンランドをけしかけ、この小国に援助への期待を持たせることで、無分別にもロシアの要求に抵抗させることとなったのだろう。

フィンランド冬戦争：英仏をけしかけるため？

- 1939年9月以来、チャーチル海相、北欧への戦線拡大を強硬に主張も、閣内で賛同を得られず
- ノルウェー・スウェーデンの中立への意思堅固ゆえ、強行すれば英が「侵略国」に
- しかし、冬戦争で世論反ソ一色、フィンランド援助名目のスカンジナヴィアでの軍事行動を英仏本格検討
- 3月27日、ソ駐英大使、英外相に、独ソ関係は軍事同盟にあらず、普通の友好関係以上のものではない、ソ連は自らの利害だけに基づいて行動する、と明言
- 3月28日、3月12日ソ・フィン和平成立で「援助」の口実を失うも、英仏、ノルウェー沿岸の機雷封鎖決定

第一幕の終了：最後に笑うのはスターリン？

- 2月11日、独からソ連への武器供与を主眼とした新経済協定締結
- 2月～3月、米国務次官、英仏独伊訪問；独は和平に前向きなものの、反対しているのは英強硬派であることを確認、伊は英仏側に寝返る可能性大の感触
- 同時期、領海侵犯等、英海軍の再度の挑発行為に対し、ノルウェー政府抗議、米にも事態改善の協力申し入れ、英は無視、米は動かず、ヒトラー先制攻撃に傾く
- 3月12日、フィンランドとの和平成立
- 4月9日、英機雷封鎖の機先を制し、独、ノルウェー侵攻
- スターリン、後は英仏と独の全面対決を待つのみ